

[成果情報名]飼料用米など非主食用向け水稻多収新品種「岩手 85 号」の育成

[要約]「岩手 85 号」は、熟期が「あきたこまち」並の“ 中生の早 ” に属する岩手県中北部で栽培可能な多収品種である。障害型耐冷性は“ 強 ”、耐倒伏性は「あきたこまち」並の“ 中 ”、葉いもち圃場抵抗性は“ 強 ”である。

[キーワード]イネ、岩手 85 号、非主食用、多収品種、飼料用米

[担当]岩手農研・技術部・作物研究室

[代表連絡先]電話 0197-68-4418

[区分]東北農業・作物（稲育種）

[分類]技術・参考

-----  
[背景・ねらい]

いわてオリジナル水稻品種開発事業では、低コスト生産や飼料稲への利用を視野に入れた多収品種の開発に取り組んでいる。また、近年、遊休農地の増加、輸入家畜飼料や原油の価格高騰を背景に、飼料用米品種やバイオエタノール用品種の要望が高まっている。しかし、既存の多収品種は耐冷性が不十分であるため、岩手県の気象条件に適した多収品種が求められている。

そこで、耐冷性が強く、岩手県中北部でも栽培可能な飼料用米など多用途に利用できる多収品種の育成をめざす。

[成果の内容・特徴]

1. 「岩手 85 号」は中生の多収品種の育成を目標として、1994 年に「北陸 188 号」を母、「岩南 20 号」を父として人工交配を行い、選抜・固定を図ってきたものである。
2. 出穂期が「あきたこまち」並からやや早く、成熟期が「あきたこまち」並からやや遅く、育成地では“ 中生の早 ” に属し、岩手県中北部での栽培が可能である（表 1）。
3. 草型は“ 中間型 ”、耐倒伏性は「あきたこまち」並の“ 中 ”である（表 1）。
4. いもち病真性抵抗性遺伝子型は“ *Pia,Pib* ”と推定され、圃場抵抗性は葉いもちが“ 強 ”、穂いもちは不明である（表 1）。
5. 障害型耐冷性は“ 強 ”、穂発芽性は“ 難 ”である（表 1）。
6. 収量性は「あきたこまち」に比べて明らかに優り、玄米千粒重は「あきたこまち」よりやや大きい（表 1）。
7. 450 本/m<sup>2</sup>の穂数が確保された場合に、粗玄米収量が 750kg/10a を上回る事例が多いが、倒伏による減収の可能性も高まる（図 1、表 2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 適応地帯は岩手県中北部の「いわてっこ」および「あきたこまち」作付け地帯である。
2. 飼料用米、米粉用などへの利用が考えられる。
3. いもち病真性抵抗性遺伝子型は“ *Pia,Pib* ”、葉いもち圃場抵抗性は“ 強 ”であるが、穂いもち圃場抵抗性は不明であるため、発病がみられた場合は防除に努めること。
4. 耐倒伏性は「あきたこまち」並の“ 中 ”であるため、極端な多肥栽培は避けること。また、十分な中干しを行うこと。

[具体的データ]

表1 特性の一覧

系統名	岩手85号		交配組合せ		北陸188号／岩南20号		
特性	長所:多収である。 障害型耐冷性が強い。				短所:耐倒伏性が「あきたこまち」並の中である。		
調査地	岩手県農業研究センター(北上市)					県北農業研究所(軽米町)	
試験名	育成地		奨励品種決定調査			奨励品種決定調査	
調査年次	2004～2008年		2007,2008年			2008年	
品種名	岩手85号	あきたこまち	岩手85号	あきたこまち	べこごのみ	岩手85号	いわてっこ
早晩性	中生の早	中生の早	中生の早	中生の早	早生の早	中生の早	早生の晩
草型	中間型	偏穂数型	中間型	偏穂数型	穂重型	中間型	偏穂数型
出穂期 (月日)	8月3日	8月4日	8月1日	8月1日	7月27日	8月11日	8月9日
成熟期 (月日)	9月14日	9月15日	9月18日	9月13日	9月13日	10月13日	10月6日
稈長 (cm)	77	76	77	78	70	91	88
穂長 (cm)	18.4	18.0	18.9	18.4	19.2	18.2	18.0
穂数 (本/m <sup>2</sup> )	410	420	388	417	292	472	565
玄米収量 (kg/a)	68.7	55.9	67.5	54.6	37.5	78.5	68.6
対標準比 (%)	123	(100)	124	(100)	69	114	(100)
粗玄米重 (kg/a)	70.5	59.3	68.3	56.7	38.7	81.3	69.7
玄米千粒重 (g)	22.8	21.7	23.8	22.5	23.8	22.6	22.4
玄米品質(検査等級)	3.9	2.5	2.9	2.0	8.0(H20年)	3.0	2.0

注 1)いずれも標準施肥区の結果。

10a当り窒素施用量は、2004,2005年は基肥5kg+幼穂形成期追肥2kg、2006～2008年は基肥6kg+幼穂形成期追肥

2)玄米収量の篩目は1.9mmを使用。平成19年の「べこごのみ」は不稔多発により減収。

3)検査等級は1等上(1),1等中(2),1等下(3)～3等上(7),3等中(8),3等下(9),規格外(10)とした。

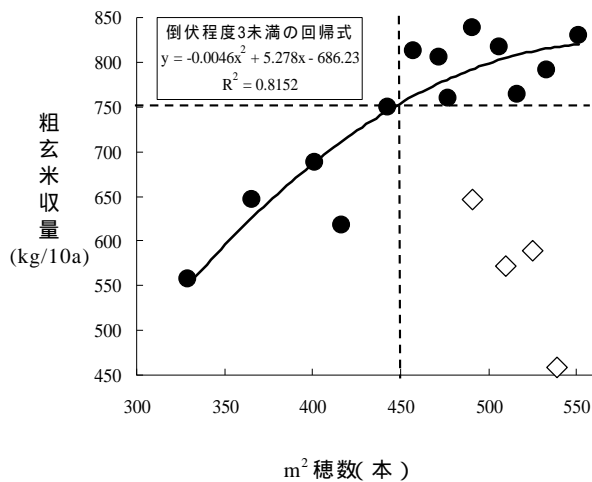


図1 m<sup>2</sup>穂数と粗玄米収量の関係(2007～2008年)  
(農研センター県北研究所、二戸・八幡平現地圃場)  
倒伏程度3未満 倒伏程度3以上

表2 岩手85号の施肥と粗玄米収量(2008年)

場所	移植日 (月/日)	窒素施用量(kg/10a)				稈長 (cm)	穂数 (本/m <sup>2</sup> )	倒伏 (0～5)	収量*** (kg/10a)
		基肥	分けつ	幼形	減分				
農研 (軽米)	5/21	6	2			88	457	0.4	813
		8	2			91	472	0.4	805
		9	3			90	506	1.3	817
		9	3	3		89	491	2.2	839
		12*				75	366	0.0	646
		12				86	477	0.2	760
		12				92	551	2.2	831
		5/30	9	3			89	517	0.5
八幡平**	5/20	6	2	2		102	524	4.0	589
		6	2	2	2	105	510	5.0	572

分けつ期: 6/28(八幡平)

\*全量鶏ふん \*\*堆肥2000kg/10a投入 \*\*\*粗玄米収量

網掛け: 推奨する施肥例

[その他]

研究課題名: 多様な消費者ニーズ・生産基盤等に対応した商品性の高い、いわてオリジナル品種の開発

予算区分: 県単

研究期間: 1998～2008年度

研究担当者: 菅原浩視、阿部陽、高草木雅人、佐々木力、仲條眞介、木内豊、中野央子、田村和彦、扇良明、尾形茂、小田中浩哉、神山芳典